

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第769号 平成26年7月14日

## 女性の登用

「原始、女性は実に太陽であつた。真正の人であつた。今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。」で始まる一文は、平塚らいてうが雑誌「青鞥」の発刊を祝い、創刊号の冒頭に掲載したものです。

「青鞥」というのは、ロンドンにおける文芸愛好家のサロンで、出席していた一人の婦人が青い靴下（ブルーストッキング）を履いていた事に由来し、学識のある開明的な女性を指していたようです。

平塚らいてうは、1911年（明治44年）に与謝野晶子や野上弥生子らと共に女性による同人誌を発刊します。「青鞥」はその雑誌名ですが、彼女のほとぼしるエネルギーを受けて、その後の女性解放運動のシンボルとなって行きます。

平塚らいてうは、「原始、女性は太陽であつた」の中で、「男性と云ひ、女性と云ふ性的差別は精神集注の階段に於て中層乃至下層の我、死すべく、滅ぶべき仮現の我に属するもの、最上層の我、不死不滅の真我に於てはありやうもない。」と、人としての根本においては、男女の性的差別は有り得ないと述べています。彼女のその信念こそ、様々な迫害を受けながらも女性解放運動を支え推し進めた原動力であったに違いありません。

それから100年余りが経過した今、安倍政権は、「女性が輝く日本」をつくるための政策を打ち出しています。

それは、「待機児童の解消」「職場復帰・再就職の支援」「女性役員・管理職の増加」、「子育て後の起業支援」を内容とするもので、女性の力を日本の持続的な経済成長につなげる事を目的に打ち出された政策です。

これらの政策は、いずれも女性の社会参加を促す上で大変重要なものですが、今日は、この中で「女性役員・管理職の増加」をテーマに考えてみたいと思います。

政府は、女性の活躍促進のために、国や地方自治体、企業に対し、女性登用の目標や行動計画の策定、公表の義務化を検討しており、来年の通常国会に関連法案の提出を目指すとしています。

これに先立ち内閣府では、全府省の次官級からなる「女性活躍・仕事と家庭の調和推進協議会」を設置して、女性登用を率先して取り組む事とし、

・女性職員の登用を進めるため全省が加わる「女性職員活躍・ワークライフ balan

ス推進協議会」を設置する

- ・省庁ごとに女性登用目標を作り、政府が達成状況を定期的に確認する
- ・育児時の短時間勤務、在宅勤務等柔軟な働き方を推進する

等の方針を打ち出しています。

女性登用に数値目標を設定して取り組むというのは、恒久的な政策としては良策とは思えませんが、しかし思い切った事をしなければ状況は変わらないという点からすれば、一つの選択肢だと思います。

ただ一つ申し上げれば、女性を特に優遇するという事は男性を冷遇？するという事でもあり、そうした中で、組織全体のモチベーションをどう上げて行くかが問題となるでしょう。

結局のところ、男性、女性にかかわらず適材を適所に配置するという、人事の原則に徹する事が重要だと思います。これは、いうは易く行うは難しです。私の経験からしても、やる気があってパワーもある女性を沢山見えています。そういう女性が、適切に能力を評価され、処遇されて来たかといえば、決してそうではありません。

少子高齢化が進み、人口減少社会を迎えている我が国において、国が先頭に立って女性の登用を進めようというのは当然だし、是非成果を出して欲しいと思っています。

なお、これまで女性登用が必ずしも十分でなかった背景には、女性を取り巻く環境にも課題がある事を見落としてはなりません。

かつて、女性登用のパイオニアとして登場した女性の多くは、男性以上に仕事の出来る人が多かったように思います。男性以上に働き、成果を出さないと評価されないと、結婚をせず仕事に打ち込んでいた女性も少なくありません。

男性にも女性にも分け隔てなくチャンスを与え、適切に評価していく事が女性の登用の前提だと思いますが、同時に、女性登用は女性を職場や仕事に縛り付けるようなものであってはならないと思います。

仕事か家庭かではなく、仕事も家庭も両立し得る仕組みを作って行く事が重要だと思います。それはいい換えると、女性が男性のように働くのではなく、男性も女性のように、仕事だけでなく家庭を大切にした働き方が出来る柔軟な社会にして行くべきだということです。何故なら、私は、「女性が輝く日本」は「男性が輝く日本」でもなければならぬと思うからです。

今の日本は、100年前の女性解放運動の時代ではありません。むしろ、少子高齢化が進み人口が減少し始めた中、女性の皆さんは、地域や会社、家庭等様々な場で生き生きと輝き、力を発揮して行く事が強く求められ、期待されているのです。

女性を原始の太陽に戻せるか、そのための仕組みや環境をどう整えて行くか、安倍政権の真価が問われています。(塾頭：吉田 洋一)